

## エッセイを読む

### ■ 今回のポイント

- ① エッセイとは何か
- ② エッセイの面白さの観点
- ③ エッセイを読んでみよう

### ① エッセイとは何か

エッセイとは、作者が実際に体験したことなどから着想を得て、感じたことや考えたことを自由な形式でつづった文章のことです。

客観的なデータや具体的事例に基づいた「論文」と違い、作者の「思い」に「随<sup>よが</sup>って」言葉が紡がれているところに特徴があります。

ゆえに、書き手としての作者がどのような場面に注目しているのか？ どんな対象に焦点を当てているのか？ 出来事のどのような側面を浮かび上がらせようとしているのか？ に注目して読んでみましょう。

### ② エッセイの面白さの観点

エッセイは、取り上げられるテーマの面白さもさることながら、構成や表現についても注目すべきところがあります。

今回取り上げる小川洋子さんのエッセイでは、作者の視点で切り取られた一風景が起点となって、子どものころの記憶が呼び起こされます。

目の前にいる<sup>存在</sup>の売りのおじいさんの向こう側に、子どものころに見たもう一人の野菜売りのおじいさんの姿が浮かび上がってくるのです。

記憶の中の光景は、大人になってから振り返られることにより、細部にわたって丁寧に掘り起こされ、かつてそこにあった場面が臨場感をともなっておりありと描き出されていきます。

そのときの天候・自分がいた場所・見えていた視界、そして、目に入ってくる光景の中で捉えられた人物の具体的なつづやき。当時、たしか小学校の五年生か六年生ごろだったと作者自身は述懐していますが、そのころの何気ない日常の風景を作者の筆はよみがえらせていくのです。

加えて、そのときに感じていた複雑な心情も、まさに〈今・ここ〉のこととして再現されます。そのときに抱いた感情のあやは、当時はもちろん、今になって

なお明確に言葉にすることの難しい何ものかです。

しかし、作家の仕事が、言葉にならないものを言葉にすることでであるとすれば、このエッセイで小川さんが挑戦しているのはまさに、言葉にできないおじいさんの想い、言葉にできなかった自分の気持ちに形を与えることにほかなりません。

そして、作家になった小川さんは、かつて見た光景の向こうに、人間という存在の本質を見いだしていくのです。

### ③エッセイを読んでみよう

今回、生徒たちには、一読したあとにこのエッセイのタイトルを推測してもらいました。

それぞれ注目するところが違ったので、さまざまなタイトル案が出ますが、作者である小川さんが注目したのは、かつての記憶の光景という一面を通じて自身がかいま見た、ひと一人が生きていくうえで避けられず背負っていくものがないかに大きいかということでした。それがそのまま、このエッセイの主題とも言えます。

今回は作者である小川さんと直接お目にかかる機会を得て、エッセイを読んてつづった感想をお伝えする機会に恵まれました。

インターネットが発達した時代ではありますが、あらゆる言葉は、具体的な誰かが生身で一つひとつ紡いでいます。たったそれだけのことで、読み手として読んでいるだけでは、なかなか実感が湧かないものです。今回、参加した生徒たちがどれだけ貴重な機会が得られたのかということ、番組をご覧になる皆さんにも共感してもらえたら幸いです。

### ■今回のまとめ

エッセイは、形式が自由であるがゆえに、作者の思いがことのほかダイレクトに表れている文章だと言えます。作者である小川さんは小説家ですから、ご自身でも気づかないうちに、小説的な道具立てを施している部分があったのかもしれませんが、エッセイであるはずなのに、読者に対して「続きが読みたい！」と思わせるのは、作者が丁寧に置いていく言葉によって形成された文脈がそうさせるのでしょうか。

言葉の向こうにある書き手の想いをくみ取れるような、読者でありつづけたいものです。